

公事根源集釋

下



○神祇令云季夏鎮火祭
 祭季夏鎮火祭義解謂
 在官城四方外角卜部
 等鎮火而祭爲防火災
 故曰鎮火。○儀式詳也
 ○延喜式有鎮火祭祀
 詞
 ○神祇令云季夏道饗
 祭季夏道饗祭義解謂
 卜部等祭京城四隅道
 上而祭之言欲令鬼魅
 自外來者不敢入京師
 故預迎於路而饗也
 ○疫癘流布時被行四
 角四境鬼氣祭對治見
 東鑑二十六
 京城四角 官城四角四
 堀 和述堀 會坂堀
 大枝堀 山崎堀
 四所ノ鬼氣ヲ祭爲

百五 鎮火祭 同日

卜部氏乃人火とらるる文城乃田の
 ことにて祭事乃火災を御守り
 けたるをいふ祭終乃わひに祓納
 けりゆりし御守なり

眞 道饗祭 同日

是の疫神の祭なり毎季小治り
 御守なりと云ふは終りゆり
 部の人京城の四角に路して鬼魅
 方より集りしと京師に入らず御守

陰陽寮ノ人ニシテ此四角
四界(遣ハシ、也)朝擊
羣載第十五ニシテ

楠米 ○西宮記九条殿
年中行事ニ東手於近
御寺給之、北手於右近
馬場給之西手於右兵
衛馬場給之云又人敷
並米鹽又二枚官勅作
之

○月令仲春之月是月
也日夜分雷乃發聲仲
秋之月是月也日夜分
雷始收聲

西宮抄六一 西宮抄六
月 雷鳴陣 大聲三
度以上 秋節候宜且止
雨度 大將以下帶弓箭
候御前係候額間 左右
兵衛立南庭敷雷鳴御
座鳴笛時分陣遣后殿
外衛督佐候殿上著帶
弓箭候籠中解陣
御殿孫庇 海人藻芥云
清涼殿孫庇十甲八槍皮
菅ノ庇ノ外ニ又板庇ラサレ

為小路より供物とて入て申は
也シシク道邊ノ家ミヤ角四境ノ家と
とて也

西七
穂米

東山西山小山をとりし取の山を
ふたがなまは法原小米堰と穂
軍かたりし卿陣小法きそ人教の
勅又と奉ゆまは月賑給六月の穂米を
肌質露孤獨ハもれ小米派ハもれ
りありりハもれ半ハもれ

頁
雷鳴陣

此事あがら年中行事ハは入は
月令ハ又小春ハ小雷ハと云と穀一林
ハ小雷ハ冬とハ冬とハ冬ハ夏
とてハ小春ハとハとハとハとハと
とてハ小夏ハとハとハとハとハと
ハとハとハとハとハとハとハとハと
ハとハとハとハとハとハとハとハと
ハとハとハとハとハとハとハとハと
雷ハ聲とハとハとハとハとハとハと
ハとハとハとハとハとハとハとハと

百槍皮膚三時雨ノ音
聞エ子板底ヲサシテ時雨
音ヲ聞カシト爲也

龍卷方舎

○倭名鈔十襲芳舎在
蘇我余北加美奈利乃
豆保以舞龍俗謂之雷
轟

延喜御宇

○倭名鈔霹靂霹靂二
反俗云加美一云加美
霹靂也霹靂也所歷皆
破折也

○扶桑略記云醍醐天
皇延喜八年五月廿六
日戊午午三刻從愛宕
山上黑雲起急有隱澤
俄而雷聲大鳴隨清涼

殿坤第一柱上有霹靂
神火侍殿上者大納言
正三位兼行民部卿藤
原朝臣清貫衣燒胸裂
夭亡年六十四又從四
位下行右中辨兼内藏
頭平朝臣希世燒顔而
臥又登紫宸殿者石兵
衛佐忠包髮燒死亡紀
薩連腹燔悶亂安曇宗
仁膝燒而臥民部卿朝
臣戴幸至陽明門外
戴車希世朝臣戴幸
至修明門外戴車時兩
家之人悉亂入侍哭泣
之聲禁止不休自是天
皇不豫

高平氏ノ小子

此故事十節記出

下を清乃次将^シて^テら^ニ着^ルと^テ帯^ハり^テく
御殿乃孫^ハ小作^シて^テ御門^ノ外^ニ後^ニ
奉^リつ^テなり^ニ御監^ノ下^ニ御^ノ後^ニ
去^リて^テある^ニ一^ニ皇南^ノ殿^ノ前^ニ毎^ニ日^ニ
御^ノ是^ト雷^ノ鳴^ル陣^トい^ハり^テ也^ト又^ニ同^ノ於^テ是^ニ
舎^ト雷^ノ鳴^ル乃^レ法^ヲ不^レと^スも^ト一^ニあ^リ也^ト雷^ノ鳴^ル乃^レ
と^スれ^バ又^ニ陣^トと^スく^ニ儀^式あり^テ延^喜元
御^宇小^清涼^殿中^霹靂^震と^シて^テなり^ク
し^キに^めし^キと^シゆ^ルあり^キ
七月

百九 唐瀬新田宗 四日

四月小作^ノか^ウて^テある^ニと^ス不^レ及^フと^ス
早^ニ七日^ノ御^ノ氣^ノ候^ト
内^ノ得^ル可^クし^キは^シ浅^ク洞^ノを^シま^シめ^テく^レべ^シ
と^ス用^ル事^ハ少^クあり^キ事^ハも^トむ^シじ^ニし^キ事^ハ
氏^ノ小^子七月七日小^死し^キり^キも^ト雷^ノ鬼^ト
なり^テ人^ノ小^癩病^トい^ハれ^ル乃^レ思^ハ存^ル日^ニ
表^シ候^トと^スあ^リし^キつ^キゆ^ルも^ト一^ニ宗^ノ候^ト
り^テ是^をま^シり^キ是^レ年^中に^レ癩^病浅^ク
の^そく^とい^はる^事

高平氏ノ下

三

乞巧奠

七日 江次第八

○江次第云朱漆高机
四脚立建上

○江次第云自御所申
下第一張道東北西北
等机上此妻延喜十五
年例用

○裏書云立柱有三様
常用半呂半律秋調子
也

○六百番歌合顯照歌
サタヲク星合ノ空ノレ
トテ秋ノシラニコトヲ
ツル

盤調八月ノ律也唐
三入中呂下云

管絃音義云盤涉調音木
律所以名盤涉調者一
切江河必有迴曲流入
於海故水音名盤涉也
平呂半律或樂書云黃
鐘調大食調律呂之調
也平律調也

烏鶺韻府烏鶺旗河
成橋渡織女淮南淮南
子八漢淮南王劉安作二
十一卷今淮南子二
此事ナレ
續齊諧記吳均作也

先七日なれは為人仰てうと候りし
拭取小入く乞巧奠あり御殿乃遊り
法く虫四子やくとそく清涼殿也灯臺の平法
灯あり机乃上小色く此物とて多
く筆れことあらとそく是とそく
此く虫乃上火とりの小取とすくは
たお物あり多しひ小入とくは
此星とそく柱地小ころ候あり法
此の盤一しき調半呂半律あきし法

月へなり是は秘事とてゆらぬ小あ
人とのまかり觸蟻のこまと和行

諒闇時猶祭天曆内裏穰時猶祭應和

天平勝興七小海らねり
き小の亭半織女あけりりこれあひ
ぬねく烏鶺乃あすけ川小さるりて法
とそくのべ橋とそくて織女渡りて
り淮南子と書小みくあり又續
糸サイ諾カキ記小云桂陽城乃武下とりの人
仙道とそくおとふふりていしく育
七月小織女河とりける事ありとそく

郝隆腹中

○蒙永上世說郝隆七月七日出日中仰臥其故曰我腹中書也
阮咸○書言故事十卷竹林七賢傳七月七日諸阮庭中鋪陳其非錦繡成時總角乃習長竿標大有犢鼻於庭中日未能免俗聊復爾耳
泰善元興寺僧也○天長五年二月廿五日太政官符應修文殊會畢右得僧綱牒備贈僧正傳燈大法師位勤操元興寺傳燈大法師位泰善等識內郡邑廣設佛會辦餘食等施給貧者此則依文殊涅槃經云若有眾生聞文殊師利

名除却片二億劫生死之罪若禮拜供養者生之處恒生諸佛家緣文殊師利威神所護若欲供養修福業者則化身作貧窮孤獨苦惱眾生至行者前也而今勤操遷化泰善獨在相尋欲行增感不已望請下符京畿七道諸國同修佛會須國司講讀師仰所部郡司及定額寺三綱等郡別於一村邑屆精進練行法師以為教主每丰七月八日令修其事云云中納言兼左近衛大將從三位行民部卿清原真人夏野宣奉勅依請云

うらゝと渡がとひひたれの織女志は
居く奉平小指ととこくふきと
織女奉平のつとく世を人
侍つる也乞巧といふ事もふあ
ふり事おら終り七夕祭とも云なり
新美とつり人供をとりて海と
平ゆくとたきてふなりと
の系流もと一車といのらふと
同小出叶といりこ世ゆふ乞巧と
し也郝隆の腹中書と云く阮咸の

半之禪といひたれと
是の東寺西寺をたつる仁明天皇
天長十年七月小大法師泰善と
めく又殊會と行ゆあは七月小出事
わくも中格小く知く

文殊會 八月

内務寮沖多供と持る小書御座南
徳月小菅名度一枚と敷くまじ家七

盃蘭盆 十四日

五

天平五年。續日本紀
云聖武皇帝天平五年
秋七月庚午始令大膳
職備孟蘭盆供養

孟蘭盆。釋氏要覽下
卷梵蓋孟蘭此云救倒
懸也

翻譯名義云盆是此
方貯食之器三藏云盆
羅百味式貢三尊仰大
衆之恩光救倒懸之窘

急

翻譯翻譯名義集一翻
譯者謂翻梵天之語轉
成漢地之言音雖以別
義則大同宋僧傳云如
翻錦繡背面俱華但左
右不尚耳譯之言易也謂
以所有易其所無故以

此方之盆而顯彼上之法

○六神通 天眼 天
耳 他心 神境 宿
命 漏盡

○孟蘭盆經云於七月
十五日佛歡喜日僧自
恣且以百味飲食安孟
蘭盆中施十方自恣僧

云疏自恣者自己之過
悉他所舉

又自恣事釋氏要覽下
卷詳也

○雲鬘抄相撲節より

供御人相撲ヲ奉仕人
即諸國ノ防人也

御前相撲ノ奉仕人

即諸國ノ防人也

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

御前相撲ノ奉仕人

○先二三月比大將以下於陣座定相撲使事關白大將隨身陣官賭弓矢數者等爲使遣諸國七道各相撲人也

○江次第云勝方乱聲飯負左勝者後頭右勝者納蘇利均其奏往年勝時先奏納蘇利大奏勝也都麻伊田且伊氣婆和可礼五平之美奈氣技家卒

○相撲夜出日相撲人取相撲也宇多天皇紀
○扶桑略記云相撲事從柏原天皇御代至今代の天皇皆盡好之貞觀以後寂然無事今聖主不捨之亦不樂乎
○又延喜元年七月廿八日丁丑御覽童相撲廿番於綾綺殿有此事

事不の先十六七月迄あひひふは作の
里之御勅と奉て左右乃次お小相撲あり
御まじりしとめしにやあふたなる
を清方とりあて國之使とくし一七相
撲とめしと是とあ葉しとあしり使とし也
廿六日小内取といふ事とまじり仁壽殿
江次第裏書云六月廿六日小月廿五日於仁壽殿東庭行之御物忌時於清
原殿有之近年申御物忌時義云内取之習礼也故左與左右與右相撲也
よお御まじりたるの相撲人續鼻けり人小なり
東庭ニテ相撲十五番畢若右故障
延久三年江記云相撲人三十人次第行列其裝束鳥帽袴
不着下衣袴從既左右各二十八也
あはれいゆとさくく一とふまじりしはれく

裏書云召合抜出者左右相撲相合也
勝面あり廿八日小忍合あり天白皇南殿小
大月廿八日小月廿七日

お御まじりたるの相撲人續鼻けり人小なり
江次第云取奏之儀寛仁二年有論二條大関白先補笏次取奏文見之次補
次將所持杖後取實大臣見文畢之後取將所持杖自補文云補笏取文或左
腋補笏見文一日暮者不必究敷止之云云
とりの十七日ありて勝の方此多ありき
廿九日小抜出とく相撲とくくしては所
覧とく海也神龜三子小くくめく徳國
しりありののがあしり取實平七子しり
童相撲と清方ありあしりく相撲れ
あしりはしり小月本紀小島仁天皇七
年七月小島麻乃ひり小島士あり名

と高麻の賑連とりのらうは事
角あもさたに會一天皇けり
字はくも小はくふ人々事
しるひのびまうへ出雲國も
おのあり野見宿禰もこれけり
一紙巻と別これとけりて相撲
と沖浪坊らふ野見宿禰かゆらり
らるもきん賑連らうとらう
てらうとらうふあこけりけり
とまひらうとらうとらう

言成朝相撲之始也

皇五 祈年穀奉幣

是の年穀といのらうたりふ女二社小
とらうとらうとらう二月と七月と
びらうとらうとらうとらうとらう
たりの也

皇六 仁王金會

是も春のふふあり

皇七 八朔風俗

こ法事いさう小な説けり又正禮うも

大極殿

○仁王金會懸五大力菩薩像一鋪行之

之三方同三年正月九日
 條天皇十二歲禁中三三三
 御事元由くしりく後堀
 川院御方六御位ニカセ
 給平官モラニカス定テ
 佐度院官タチノ踐祚ヤ
 シスラ上ノ聞ヲキタリナ
 ケレ主時ノ御相ニ交西
 辻修明門院ニイリツフ
 トイ下モ天照大神御ハ
 カラヒヤ侍々同十九日關
 東ノ城ノ義景早打ノ
 ありテヒツカニ承明門院ニ
 イリテ御位何波院宮ト
 申下申侍也公家イカ御
 公方ニモ侍之ト申下カ法
 隆寺殿一条大相國モ
 申下下リ又三月十八日御
 奉下三三三太政官廳ニ御
 即位アリ

○天神事大鏡扶桑略
 記患管抄北野縁起等
 詳也

ゆゑに於てゆゑに...
 御ありくわらまき...
 上丁日

真 擇奠 上丁日

春二月小おる

百九 北野祭 四日

小野に於て神乃神事ハ人ニレモ道子事
 してゆきとまき...
 延喜聖乃神門ニ右大臣延二位菅原物部
 とて侍ふまき...
 後二位是善御とてゆき昌泰四年

女乃右大臣時平公カモ後言ふ...
 神乃神事ハ人ニレモ道子事
 してゆきとまき...
 二月女乃配前...
 下...
 延喜女三...
 延喜女三...
 延喜女三...

之三十九年正月九日
 條天皇十二歲禁中三十五册
 御事不由くしり七後堀
 川院御方六御位ニガセ
 給半官モラハニサス定テ
 佐度院官タチノ踐祚ヤ
 シスラ上テ聞ワキタリナ
 ケレ主時ノ御相西安西
 辻修明門院ニイリツフ
 トイトモ天照大神御ハ
 カラヒヤ侍々同十九日関
 東ノ城介義景早打ノ
 赤リテヒツカニ承明門院ニ
 イリテ御位何波院宮ト
 申テ申侍也公家イカ御
 公家ニモ侍ト申テヤカ法
 隆寺殿一条大相國モ
 申今下リ又云三月七日御
 事并ニテ太政官廳ニ御
 即位アリ

○天神事大鏡扶桑略
 記慮管抄北野縁起等
 詳也

公事根原下

けり也程くゆくくき人御けきうての
 御あくわらまきさなるり

真 擇奠 上丁日

春二月小おる

百九 北野祭 四日

小野に天神の神事い人これと進子事
 してゆきと進子事いゆきゆき
 延喜聖の神門は右大臣延喜二位菅原朝臣
 とて侍ふまきゆきゆき神父の参儀
 從二位延喜御とてゆき昌泰四年
 女白右大臣時平公名延言小くてを案
 神ふのいれまきゆき外十二人相を
 一き女七日ふた遷とて延喜三年
 二月女白配而まては并ふくれ
 後よ君後とゆ天神とも奉りて天
 下まきゆきゆき先女白延喜神神時
 より屋うやくと神乃神靈とて世中
 りあそゆき事ともいづくき
 二月延喜女三と四月女日小又宣命と下
 ちく贈官贈位とて事ありて昌泰

二月延喜女三と四月女日小又宣命と下
 ちく贈官贈位とて事ありて昌泰

公事根原下

四年の宣命とは慶長に於て御心三層元
年七月小代宮ありて右近の馬場小代
と云給ふより宗の一条院の御時より
のりり家宿幣をく祇園小代

皇
定考

十一日

是の昔六位の加階と云ふ人の加の藝
能の疎懶と云ふのく業爵と給ふ
所の上の官の東に應の産小つあぐ事
との物次小代取小御く三献の儀式あり
次小代總代應小代く又おれく三献

○名目決定考逆讀之
例也

○日本紀二十
上日

○祿令云貞八月至正
月十日一百二十日以
上者給春夏祿

りく一の美と云ふ下れ冠よる人位
白菊御云の黄菊参議つらうたんとお
冬と船時の美法よる美小あ
す大く二月の別見小御一或是の
省より徳司の掾の上目と選成よる事
と別見といふそれともあけりて奏
よる儀擬階の奏といふいふと云ふ
おしてよるゆると定考よる也定考
と文字よるゆると考定よる
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

胎中天皇○日本紀十

七住吉神初以海表金銀之國高麗百濟新羅任那等授胎中譽田天皇此胎中心仲哀天皇時住吉神海表國ヲ征冬下勸冬上仲哀天皇信之入神々々ハサ

テ胎中ノ号アリ

舉由天皇○譽田昔射時左手執云物ヲ掛母后三韓御退治時勸貢冬リト似タニテ御誕生時左御手執如左痛生ニタリ仍テホム多天皇申冬之譽田ヲ假名也日本紀ヲ考之

○菱形池豐前國宇

佐郡アリ○諸宣集一菱形者三山之總名也北辰影向之地也峰形如菱之角三山者三龜山在北方似龜形山小倉二大尾山在東爲龜山尾三官山菱形耶小倉乃山之下津石根官柱太敷立是也○又云菱形之稱斯峰之體如菱之角非一山之秀分三方而崎於松林之間有自然之池隨山總名之故稱菱形池

○紀貫之歌

豐國ノ菱池也蘆ノ根トルトヤイモカ袖ニシケリ

叙令小々ナリシキ事ハの方ヲ其儀ニシキ
江家一也
考トシテ大辨ハ下ノ人東ノ庭ノ小々
行由申之

石清水放生會 十月日

内裏トシテハナリ事ナリ
辨來府方トシテ山小ビ子宮令内
爲察志使心ナリ柞八幡大差薩トヤ
奉ニ及人五才十六代ハ神門意神天皇
此御事ナリ仲哀天皇乃中四ノ皇子

神母ハ神功皇后也胎中天皇トモ又ハ奥
田天皇トモ名法者奉ラ天下ト云海一
ノト事四十一才百十一才ハ
リハ坊給欽ハ天皇乃神代小娘ト神ト
形ト筑紫ハ肥後國美形池トノ子取小
孫トト道治子人五十六代譽田八幡丸也
ト院室ありキ譽田ハハハ神名八幡宮
孫乃号給ハ豐前國宇佐乃云々志傳ナリ
給ヒハハ重武天皇東大寺建立乃故
巡禮志給子乃志ハハ院室ありハ威儀

得道來——御託宣ハ

勝尾寺開成昔々之御

託宣也此ヨリ以來大菩

薩号了桓武末之迄

○日本紀欽明紀訓

○解脫ニスルカ

八正道○彌勒菩薩説

瑜伽師地論卷第六十

七攝大釋分中聲聞卷二

問何因緣故正語正業

正命説爲戒蓋答二因

緣故一依正受用法故

二依正受用財故謂正

語正業戒爲根本戒爲

所依方能受用一切正

法是故説名依受用法

由正命故不依矯詐等

起邪命法求衣服等此

爲根本此爲依處止受

用財是故説名依受用

財又於是處世尊説爲

增上清淨意現行性此

中依止貪等起犯戒思

依止矯詐等起邪追求

衣服等思若離此事應

知是名增上清淨意現

行性 問何因緣故正

見正思惟正精進説爲

慧蓋答由此慧蓋略有

三種作業因此三法方

得究竟謂通達諸法真

義是初業通達諸法真

義已即於真義爲他宣

說施設建立分別開示

令其易了是第一業爲

斷餘結法隨法行是第

三業如是三業由正見

正思惟正精進故如其

次第而得究竟 問何

因緣故正念正定説爲

公事抄源下

とらへんくじへんくじ家又神徳をて所

お京乃儀ありき屋て坊ちふ初精了

さうさんと初使介とい程字依は満り

さ清和乃神時の人安幸徳備仍お字依

小南うてさるしり靈者ありて今世若

山石清有少く法すすまふかしまふあり

ありし後い初幸も奉幣も石清あり

小所り一代小一尊字依も初使を多

てゆつゝ家二取乃宗廟ともい大起太

神并小八幡大菩薩か神事也八幡大

菩薩と神名い神徳宣小得通來不重

法性示八正道爲推迹得解脱若衆生

故号八幡大菩薩といわり八正とい内典小

心見正思惟正語正業正命正精進正定正

念是と八正道といふ大い心正行進

辛酉十二月二日夜見瑜伽論改始念作惠

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

身口意

定瀧答二因緣故一由自性故二由所依故由自性者謂三摩地由所依者四因緣故念於此定能作所依一繫所緣故謂於四念住繫攝其心二隨順定故謂由此念於守護根門正知而住順歡喜處隨念作意中能隨順定三能斷蓋故謂於各別不淨觀等諸蓋對治作意能斷諸蓋四極多修習相作意故謂遠離者於止舉捨相無間殷重加行中能多修習是故此念為定所依

八色幡〇八色幡即應神天息御正體幡神也幡軍陣大事物出陣時先幡祭古禮也

三昧耶形〇空海四種曼荼羅義云且於畫造諸尊者以五大色畫作影像者大曼荼羅造所持刀劍蓮華等三昧耶曼荼羅持鐺刻等像羯磨曼荼羅畫三十七尊等種子字者達磨曼荼羅〇又云三昧耶曼荼羅所持標幟是也〇又云三昧耶平等類之義〇三昧耶形略三形上云除陀三尊拾芥下本

阿彌陀三尊觀音勢至菩薩也〇衣笠內府歌石清水スミレケ月影ノ三ノ衣カケウツミレ續古事談第四行教和尙一頁九句宇佐宜籙書大乘經讀夜八眞言ヲ誦ヒテ法樂反テミル九句

三ナシトス時我王城近邊ニ向テ國家シモリタミツテ託宣給テ涙ヲ流シテ十日延テ御體自タニツリト初

ニ衣箱ヲ見シト託宣テケレハ是ヲ見シ七條袈裟ノ上字ニ非ス繪ニモ非ス阿彌陀三尊現タニ行教此御姿

ヲラツレテニツルサテ京ハナリテ此由ヲ奏ス帝御夢男山上ニ紫雲ヲクテホリテ王城ヲ覆御覽ニ此事上ハ

レトイフ御殿ヲ作内裏中ニ此御體ヲカケテケレ久取テ見ケナク御殿額御座ヲケ時ヲ台全テ敷此内殿ハ

中ノ常ニカクハレキ香ニカヘリト

〇翻譯名義集七袈裟具云迦羅沙曳此云不正色從色得名章服儀

如經中環色衣也會云准此本是草名可染衣故

將彼草具此衣號十誦以爲數具謂同氈席之類陸

婆多云器具者三衣之名大淨法門經云袈裟者晉名去

微不集名離染服賢惠名出世服直諦雜記云袈裟是

外國三衣之名名多義或名離塵服由斷塵故名

瘦服由割煩惱故名蓮華服服者離者故名間色服

以三如法色所成故云三衣者律有三種壞色青黑赤樹

謂銅青黑謂雜泥木蘭即樹皮也善疏云聽以爲成法

衣亦爲是賊所割故云應法師云韻作毳筆音加沙葛

洪字苑始改從衣

頂戴之く男山には安置了けり
神の本地といふ事多し
昔のあきほりなる澄持あり
く或は又昔靈鷲山にて
と況くも或は初より
薩摩のりも後室に
八心乃橋とくそく八心乃橋
敬一奉ふもさ也く
敬一奉ふもさ也く
敬一奉ふもさ也く
敬一奉ふもさ也く

最勝王經

最勝王經。金光明最勝

王經也。十卷。唐三藏法

師義淨奉制譯

○金光明最勝王經卷

第九長者子流水品第

二十五爾時佛告其提

樹神善女天爾時長者

子流水於往昔時在天

自在光王國內療諸衆

生所有病苦令得平復

受安隱樂時諸衆生以

病除故多修福業廣行

惠施以自歡娛即共往

詣長者子所咸生尊敬

作如是言善哉善哉大

長者子善能滋長福德

之事增益我等安隱壽

命仁今實是大力醫王

慈悲菩薩妙開醫藥善

療衆生無量病苦如是稱歎周徧城邑善女天時長者子妻名水肩藏有其二子一名水滿二名水藏
 是時流水將其二子漸次遊行城邑聚落過空澤中深險之處見諸禽獸豺狼狐獾鷓鴣鷲之屬食血肉
 者皆悉奔飛一向而去時長者子作如是念此諸禽獸何因緣故一向飛越我當隨後暫往觀之即便
 隨去見有大池名曰野牛其水將盡於此池中多有衆魚流水見已生大悲心時有樹神示現半身作
 如是語善哉善哉善男子汝有實義名流水者可憐此魚應與其水有二因緣名為流水一能流水二
 能與水汝今應當隨名而作是時流水問樹神言此魚頭數為有幾何樹神答曰數滿千善女天時
 長者子聞是數已倍益悲心時此大池為日所暴餘水無幾是千魚將入死門旋身宛轉見是長者
 心有所希隨逐瞻視日未曾捨時長者子見是事已馳趣四方欲覓於水竟不能得復望一邊見有木
 樹即便昇上折取枝葉為作蔭涼復更推求池水中水從何處來尋覓不已見一大河名曰水生時此
 河邊有諸漁人為取魚故於河上流懸險之處決其水不令下過於所決處卒難修補便作是念此
 崖深峻設百千人時經三月亦未能斷沉我一人而堪濟辨時長者子速還本城至大王所頭面禮足
 却住一面合掌恭敬作如是言我為大王國土人民治種種病悉令安穩漸次遊行至其空澤見有一
 池名曰野牛其水欲涸有千魚為日所暴將死不久唯願大主慈悲愍念與二十大象暫往負水濟
 彼魚命如我與諸病人壽命爾時大王即執大臣速疾與此醫王大象時彼大臣奉王執已自長者子
 善哉大士仁今自可至象廐中隨意選取二十大象利益衆生令得安樂是時流水及其二子將二十
 大象又從酒家多借皮囊往決水處以囊盛水象負至池瀉置池中水即彌滿還復如故善女天時長
 者子於池四邊周旋而視時彼衆魚亦復隨逐循岸而行時長者子復作是念衆魚何故隨我而行必
 為饑火之所惱逼復欲從我求索於食我今當與爾時長者子流水告其子言汝取一象最大力者速
 至家中啓父長者家中所有可食之物乃至父母食物之分及以妻子奴婢之分悉皆收取即可持來
 爾時二子受父教已乘最大象速往家中至祖父所說如上事收取家中可食之物置於象上疾還父

公事根原下

七

公事根原下

七

かゝりのえ正天皇乃沖宇養老四年
 九月異國法皇乃時大菩薩心淨力
 小してよやくとく異教とありそけり
 てのら大菩薩乃鏡室小合戦乃わひ
 多むくくの人びと海一に救生會と
 行海さなるとあり一ふしてあり
 一徳國してこ世事とて救生れい
 一さ事寂勝五治長者子流水品計
 池奥の事しりたこまろくわゆと
 いちろとわいり沖りひびかた

政事要略大隅日向集人云云

所至彼池邊是時流水見其子來身心喜躍遂取飯食偏散池中魚得食已悉皆飽足便作是念我今
施食令魚得命願於來世當施法食克濟無邊云云佛告善女天爾時長者子流水及其二子為彼池
魚施水施食并說法已俱共還家是長者子流水復於後時因有聚會眾妓樂醉酒而臥時十千魚
同時命過生三十三天起如是念我等以何善業因緣生此天中便相謂曰我等先於瞻部洲內隨傍
生中共受魚身長者子流水施我等及以飯食復為我等說甚深法十二緣起及陀羅尼復稱寶髻如
來名號以是因緣能令我等得生此天是故我今咸應詣彼長者子所報恩供養爾時十千天子即於
夫沒至瞻部洲大醫王所時長者子在高樓上安穩而睡時十千天子共以十千真珠瓔珞置其頭邊
復以十千置其足處復以十千置於右脇復以十千置左脇邊再曼陀羅華摩訶曼陀羅華積至于膝
光明普照種種天樂出妙音聲令瞻部洲有睡眠者皆悉覺寤長者子流水亦從睡寤是時十千天子
為供養已即於空中飛騰而去於天自在光王國內處處皆雨天妙蓮華是諸天子復至本處空澤池

中雨眾天華便於此沒
還天宮殿隨意自在受
五欲樂云云爾時佛告
善提樹神善女天汝今
當知昔時長者子流水
者即我身是云云
猪鼻鼻十五日上院
下院神幸道路上院南
門大坂之經之猪鼻
到下院南門入也

於今一正久二心一の約幸小准ち
て六府ら下供奉とらる幸ふら終り
早且よの志と相と神興力ととせ給ふ
可の約幸の儀式とて多樂のちや
と先衣冠けとせ給ひ見り

猪鼻坂出崎也

○朗詠下朝有紅顏
世路暮為白骨朽郊原
慶滋微能
○占八觀政要二下特靈
神慮

勅使牧○延喜式四十
八左馬寮式御牧事詳
也

そま小苑さうんて還幸のありさゆ
神人信神系小つる家まて白杖とほ
あくくささ道不わら奉る儀式也
約小お顔ささく世給ふほささども夕
うは白骨と成く郊原小くしらわ
り世世ありさゆと志り
唐三六歳慮事也
百廿二
駒幸 十有駒幸のわいと代なる邊
る佳く
信濃勅旨牧十六箇所延喜式所載之一也
く小信濃の勅旨牧れ馬とまほ六十也

八言取原下

御馬解文

○國々ヨリ貢御馬ノ送
狀也

御馬ヲ給ハル

○江次第云次公卿以
下一く給御馬補給取
細牽出一并畢退出歸
著座

引分使

○江次第引分事は可
被奉一院 春宮執柄
也

○又云並立御馬於庭
前引分令籠人直引
出一院執柄使次將
春官候内裏者坊司來
受之或遣將主馬著
又甲斐國穗坂一五走
○此文西宮記依下書
也

公事抄

かひりくハ十有七くゆらりくも朱
雀院乃沖國志小あし家もて十有
よけく家も南殿小も沖りて沖
る成沖候とと沖る此解文は奉と
事とて公卿下は事し沖るを給
り馬候と一は成とりて沖前
とみと一和と取のと一は沖る
引分使とてはわとりて流東之
候るるも取とまの候十七有は又甲
斐乃國乃物取沖るとひくも女日小は

武苑國小野乃沖馬甲とひくも外
秩父沖る女とを野乃沖馬十のと毎
年小はてまの女と日しは流儀を月
の沖る女と廿八日しはと野沖る甲
とひくもと一は流儀を

百廿三
季沖流儀

二月八日しは二度あり

九月

御燈

三日

三月しは

公事抄

五

百五 不徳田奏 七日 式日九月五日

是日法園の田の摘去一なる所を日録
として奉記すれよつあつと租税三
分二なりと先一給小車もこの田に
諸國の評付帳とてまう道い大旨陳
述さすく行りて諸國小籠^{シキツ}約
行りつり^{子堪定}つりよとくさつ田とて
必よ不徳田とてつりよとくさつ田と
事一と

百六 重陽宴 九日

菊宴 延喜掃部寮
式九月九日菊花宴神
泉苑殿上供御座及設
參議己二座又幄下侍
從文人等座

九月九日 〇書言

故事魏文帝書歲往日
來忽逢九月九日九爲
陽數其日與月並應故
曰重陽
〇花宴河海抄云探韻
各分一字詩也

九月九日ハ花目として行進ハ菊花宴
の是と重陽宴とやと九月九日
月とりと九陽の數小叶の少ハ重陽と
はハナナリ昔ハ天子南殿ハ御あり
是會約つりと事ア濟子くらり
わく其遠乃ハハ探^タ給^ルりり又此
又是小とくく^タり^ルハ十月旬の
わくは^タりも^タハ^タと給^ルハ^タハ^タハ^タ
は小菊酒と給^ルり^タハ^タハ^タハ^タ
ハ^タハ^タハ^タハ^タハ^タハ^タハ^タ

公事根原下

費長房 續齊諧記云汝南桓景隨費長房遊學累年長房謂之曰九月九日汝家當有災厄急宜去冷家人各作絳囊盛茱萸以繫臂登高山飲菊酒此禍可避見雞犬牛羊一時暴死長房聞之曰代之矣今世人每至九月登山飲菊酒帶茱萸囊是也

昔神祇官行幸アリテ

○昔八省院行幸元延喜式太政官式云凡九月十一日行幸八省院奉幣於伊勢大神宮其使者太政官預點五位以上王四人卜定御食大臣奏聞宣命授使王并神祇官中臣忌部發遣事見遺儀式

○其後神祇官行幸後醍醐年中行事云十一日例幣行幸出御儀常コト内侍御齋持テ前後候近衛次官若六藏人扶持御輿葱花ヲ用圍司鈴奏テ神祇官行幸テ北庇御輿ヲ三張内侍二人候近衛スケ親衛ヲ取傳

前小菊瓶をくまひ葉葉乃房をわく
瓶カケいさあゝ無氣をくまひしひ常又
わひげ 費長房といふ仙人汝南の桓
景ふくまひていさく九月九日つらんら家
よ葉葉へ葉葉の囊をぬいさくひら小
け山ふのがつさく菊酒沃の徳がこ徳災
さゆへへくまひれいさく日ふいりたふ
しへのく勢志りなうけ身・けく
くくく家中の鶏犬羊くくくく死
くくくくくくくくくくくくくくく

菊酒とのむといひはくへく

夏 例幣 十一日 江次第九

一日くくくくくくくくくくくくくくく
此人各内とと是い大神奉りくくくく
例幣とく伊勢大神宮へ御幣をくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
冬くくくく神祇官へ御幣をくくく
くくくく祭主中近衛忌部ト部くくく冬て御
幣と清くくくくく使乃くくくくく
くくくく奉幣くくくくくくくくく

八省院源下

聖國者神武天皇勅詔
天日別命日國有天津
之方宜乎其國印賜標
劍天日別命奉勅東入
數百里其邑有神名曰
伊勢津彥天日別命問
曰汝國屬於天孫哉答
曰吾竟此國居住日久
不敢聞命矣天日別命
發兵欲戮其神于時畏
伏啓云吾國悉獻於天
孫吾不敢居矣天日別
命令問云汝之去時何
以爲驗啓云吾以今夜
起八風吹海水乘波浪
將東入此則吾之去由
也天日別命令整兵窺
之比及中夜大風四起
庭舉波瀾光耀如日陸
國海共閉遂乘波而東

爲古語云神風伊勢國
常也浪寄國者蓋謂之
也詔曰國宜取國神之
名號伊勢
倭神命○垂仁天皇第
四之皇女也○二所大
神官鎮坐事倭姬命世
記鎮坐本紀鎮坐傳記
三詳也
養老五年續日本
紀八養老五年九月
卯天皇御內安殿遣使
供幣島於伊勢大神宮
○養神御抄云蟲松
也 鈴鹿類人入進之
武被名賀茂社司禰心
院御時願以下向嵯峨
野誠有道遠是絲虫屋
向選虫奉之
○内藤司式云山城國

わくも天皇南殿より出御ありて是日
あり是を冬冬日向と冬日向とありて
の後水魚法那法よら向ふ冬夏日向
はありて日向と冬日向とありて
夏日向と日向とありて日向と冬日向
座あり賜沙魚儀陸儀采女法天
御膳乃水魚とありて日向と冬日向
己上拾取之なり日向と冬日向
言江次第事ヲ取用又拾不用大略書上也 裏書件水魚法鹽等給公卿云云
まよと日向とありて日向と冬日向
百三下 承子餅 上吉日

此餅の内務寮よりうつては御膳所
きくくくく十月乃吉日餅と食され
し病なりしと奉祝ありて
いひしは向日餅もみちと延喜
延喜式無支日餅事政事要略二十五引藏入式云十月初多日內藏寮進上男女
式小我し日向餅とありて日向と冬日向
料餅並禮○本朝書籍目錄一藏入式一卷是廣相與廣相自撰年中八
事ありて日向と冬日向
て大外記新重御尚る物又と海
日向と冬日向とありて日向と冬日向
し日向と冬日向とありて日向と冬日向
との餅あり

公事抄源下

三

酬皇帝歌曰已乃已臣乃志具礼乃阿米爾第乃波奈知利曾之奴倍岐阿多良蘇乃香乎賜五位已上衣被

長岡大臣○房前之孫貞猪第三之子也延曆十八年四月十九日住右大臣弘仁三年十月六日薨

春日明神ノ○新古今ニ櫻本明神ノヨミニニ歌トナリ○新古今第十九神祇歌 補陀落南ノ岸ニ堂ヲ今ノサカニ北ノ藤波 此歌興福寺ノ南圓堂ツドリハシメテ時春日ノ榎本明神ニ給ケルトナリ 榎本明神諸神記云自春日社坤坐

女神也且言勢雄明神又一書云榎本社者猿田彦孤津姫命也

補陀落南岸ノ事尊御記云興福寺一名觀音寺自昔古寺也厩坂寺事也補陀ラク南ノ岸ノ詠歌此故也

山階寺トモ申元要記第一卷云天智天皇即位八年大織冠彌室鏡女上奉爲大織冠山城國下治郡山階郷加蓋立テ丈六釋迦像ヲ安置セラシ山階寺ト名テ次天武天皇即位元年申都ヲ大和國高市郡遷カシ時山階寺ヲ彼郡厩坂移シテ仍號厩坂寺元明天皇即位ニ

公事根原下

て妙法乃大舎とひくく一母是乃十月六日長恩大臣内磨乃中忌日小はつ雨院贈大政大臣を解公ハ彼大臣御子ハ親小して父乃御ノ先小ハりくくし世路々々も御福の南無堂乃本乃不空絹索觀音乃徳母小四天王乃像ハ長岡大臣乃造立給ひ一との小因院大臣乃南無堂と寺て一之徳寺を安新ハ給一也補陀落乃南ハ一之堂ハ一之小

友乃今くさくひく春日乃御神乃人史の中小海一乃給くわそと

道一車ハ一之南園堂と建立也

時乃車ハ一之徳ハ蘇原氏之南家

小家武家京家一之回家より

一之小家の一之入也

車ハ一之ハ一之徳神奇徳也

百唐 維摩會 十日

是乃十月十六日小ハ一之七

公事根原下

年^巳和銅二年都^大和
國添上郡平城宮遷^サ
レ^ニ時大織冠ノ子淡海
公上春月勝地被立伽
藍此時改額号興福寺
同七年^甲被遂供養此
一寺之内被建立堂塔
十也

○維摩詰所說經十卷
第五卷有問疾品

和銅七年政事要略慶
雲二年卜^リ

朝之爲朝蓋是會力政
事要略維摩會石先正
一位太政大臣奉爲聖
朝安穩社稷無傾謹發
弘誓始開斯會

大粮申文○江次第大
粮申文^{十月申上}加
匙文^{一枚申之}如例申
文^{扶義御爲左大辨諸}
文^{之時作大粮式}諸
司諸衛有定國院官
隨時出入爲閨月之時
又願作代其後成官符
近代諸司院官不持官
符成催標諸國物以件
請文成承知符裏可任

公事本原

十六日冬大織冠乃沖忌日乃^ハ取^レ所^レの
興福寺ハ大織冠乃沖忌日乃^ハ取^レ所^レの
羅君中子淡海云と改^レは化^レま^レる^レ
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
大織冠病惱ニラカサテ
政事要略第廿五卷出^ル
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
ふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱

則此一品と通とるふい^ニ通^レる^レ
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱
了^レふ^レ山^ノ勝^ノ寺^ノも^レり^ナり^テ大織冠病惱

大粮申文

公事本原

三十四

○白虎通班固作也
白虎通三卷三正章
禮三正記曰正朔三而
或文質再而復也三微
者何謂也陽氣始施黃
泉萬物動微而未著也
十一月之時陽氣始蒼
根株黃泉之下萬物皆
赤赤盛陽之氣也故周
為天正色尚赤也土月
之時萬物始牙而白白
者陰氣故殷為地正色
尚白也十二月之時萬
物始達乎地而出皆黑
人得加氣故夏為入正
色尚黑

欽明天皇一〇日本紀
欽明天皇十四年夏六
月別勅醫博士易博士
曆博士等宜依番上下
令上件色人正當相代
年月宜付還使相代又
上書曆本種種藥物可
付送
賀表〇江次第一大臣
以外記令仰上臈儒士
令作賀表或大臣自仰
之
神龜二年〇續日本紀
第九聖武天皇神龜二
年十一月巳丑天皇御
大安殿受冬至賀諸親
王及侍臣等奉持奇翫
珍贄進之即引文武
百寮五位已上及諸司
長官大學博士等宴飲

中勢省らりゆ子乃唐とすむむじり冬
自と南辰小お清りりて是と清源あり
空御りも可お内竹前小はく白虎通
周の書よ十一月と二月とん是と唐
家りて正月と二月とん是と唐
月と二月とと他二月とん夏乃世は
今れ正月と二月とん人二月とん十月
二月陽りりて生海月と終ハ一年は唐
教とめんぐく今日と子りなりなり
海りしお初は唐かひりりまより事ハ

欽明天皇十四年百濟乃博士ら奉りま
る
是ハ十一月一日乃冬よ小あさる子
なりひ子小一度まのる年りてはせ
祥瑞つる小をそれせりいまは南
辰小空清りりく旬と約くくは表
と奉事なりと有祥龜二年十一月
小空大^{スホ}安殿^{アノ}小お清りりて冬をむり
辞とけ給ふり一國史ふのきり

公事本流

江次第朔旦旬トヤリ

終日極樂乃能賜祿各
有差

神祇令六 ○神祇令云

仲冬上卯相嘗祭

謂大倭住吉大神穴師

恩智意富葛木鴨紀伊

國日前神等類是也神

主各受官幣帛而祭

大倭 ○大和國山邊郡

大和坐大國魂神社三

座 住吉 ○攝津國住

吉郡住吉坐神社四座

天神 ○大和國大神大

物坐神社大神節大

輪也 穴師 大和國城

上郡穴師坐兵生神社

恩智 ○河內國高安郡

恩智神社二座 ○文德

實錄第二嘉祥三年冬

十月辛亥授河內國恩

智大御食津彦命神恩

智大御食津姬命神等

並正三位 意富多也

○大和國十市郡多坐

弥志理都比古神社三

座 葛木鴨 ○大和國

葛上郡鴨都波八重事

代土命神社二座

日前 ○紀伊國名草郡

日前神社 神主 ○令

集解 倭大倭社 大倭

忌寸住吉社 津守連

大神社 大神氏穴師

社 穴師 神主恩智社

恩智神主意富社

大朝臣葛木鴨社 鴨

朝臣アリ

喜式神名帳筑前國宗

像郡宗像神社三座

公事根源下

我朝のこ小あはれ異國より来たのこ

事より中事なりともあはれおあか

らあはれとさきにはあはれはともひ

こめきり事なれををれはは

てり十一月一日の事よいさうり

あはれをいゆるなり

相嘗祭 上卯日

神祇令には大倭住吉大神穴師恩智意

富葛木鴨紀伊國日前坐也神主とら

官中とらけりおあはれをいさひ

延喜式には相嘗祭乃神

七十一座とあり相嘗と書てあり

比の祭とし也

氏人宗像君也天武天皇

同日引宗像朝臣ト云大己貴

命ノ末葉也

宗像祭

此の胸形社の祭也氏人これと

るはあはれ天照大神と素戔嗚尊と

らるはあはれ時素戔嗚尊と

神々の同心命湯織津姬命軒杵津姬

命これ三神の日本紀に神代と卷小

事ハとあり

胸形社也 ○延喜

喜式神名帳筑前國宗

像郡宗像神社三座

公事根源下

延喜式

素戔嗚尊ノウニ冬ヒレ
宗像神、天照大神、ウニ
冬ヒレ神也、天照大神、
ニテ素戔嗚尊ノウニ冬ヒレ
湍織津姬命、湍津姫
ノ訛也、湍織津姫、
ノ神也、阿波良波命、傳
天照大神、荒魂、上云、倭
姫命、世記、八十、
神一名、イ、宗像三神
内ノ湍津姫、上、別神也
○田心、墟、湍津、
鳴姫、三女神、天照大神、
神、
中奉助、天孫、而為、天孫
所祭、上云、神、
洲、天降、玉、
事、

西曆十三

山科祭

上巳日

四月小祀

西曆四

平野祭

上申日

是も四月小祀

臨時祭、
同日

西曆五

春日祭

同日

是も二月小祀

西曆六

杜本祭

同日

四月小祀

西曆七

菅麻祭

同日

同日

西曆八
率川祭

上酒日

二月小祀

西曆九

梅文祭

同日

四月小祀

西曆十
當宗祭

同日

四月小祀

西曆十一

中山祭

同日

松尾

西曆十二

松尾祭

同日

四月小祀、
同日、
冬、
同日

公事帳原

三

とう申廿日午へ

西辛三 大原野祭 申子日

二月小おわし一喜い上法卯日かんのを
子日かんの

西辛四 國蘇韓祚祭 申子日

二月くおわし申廿日法りいへも
背倉への後とあらひどあらへる
月あへ

西辛五 五節 同日廿二あへる
式下廿廿日用也

○裏御直衣御指貫淨
文織物紫御指貫霞此窠
文也深紫淺紫共 有例
○越袴 大口
○張袴
○生袴

申廿日と五節 帳臺試し
殿うてまへと御説あり又節蘇姫へ
人介らゆいりれ儀式あつらうらくゆ
い新と儀座とらふゆゆりさのなり
て帳臺小お清うり殿へ人も
陰名抄抄袴 法師如 乃 没賀萬漢語抄云 絹狩袴 或云 岐如乃 加利八加萬
事はに候内乃外に
帳臺試小准してめし海なる帳臺小
たし

○又云承平五年無殿
上五節寬平昌泰間創

五節舞姬之り ○政事

要略第廿七年中行事

廿七十一月三日辰日節

會事 五節舞者淨御

原天皇之所制也相傳

曰天皇御吉野宮日暮

彈琴有與俄介之間前

岫之下雲氣忽起疑如

高唐袖女髻髻應曲而

舞獨入天賜他人無見

舉袖五變故謂之五節

其歌曰乎度綿度茂邑

度綿左備湏茂可良多

万乎多茂度迹麻岐底

乎度綿左備湏茂

宇摩志麻治命饒速日

尊第二子也 舊事本

紀船若余彦尊元年十月

庚寅宇摩志麻治命初

齋瑞寶奉為帝后鎮祭

御魂祈請壽祚其鎮魂

之祭自此而始矣

御脫履 ○御讓位了也

○文選四十三北山移

文履萬乘其如脫註淮

南子曰堯年衰志悶舉

天下而傳之舜猶却行

而脫履也許慎註曰言

其易也

○倭名鈿祭祀

具其手 漢語抄云葉

手比良天

公事本流一

ておのめども残と尻さびせとくたすを

うりし小ゆきききとと尻さびせとく

うりしききききとと尻さびせとく

五月ふゆきききとと尻さびせとく

のわりききききとと尻さびせとく

百五十六 法魂祭

十一月中寅有二寅下寅行之有

中寅同例云而新堂會前

可行之由見云

これ人へは魂魄の二乃玉あり魂陽氣

魄陰氣なりこれ糸の離極れ運魂成

まきききき身斬乃中存小玉のせき功

能あり宇摩志麻治命此時々の事れ

これ一 舊事本宇紀本と小みきき

此糸と如法小れきききききききき

行と成ゆきききききききききき

脱履乃ほも院中うて行ゆききき

東文中宮うてを奉るあき事なる

天女二子小ききききききききき

勢りれく貞觀元年十一月神祇宮そ

約り今いふくく半ふきききき

百五十七 新嘗會

中卯日

新嘗會の神今食よあききききき

ひきてり

公事本流一

百五十七

新嘗會

中卯日

新嘗會の神今食よあききききき

ひきてり

公事本流一

百五十七

新嘗會

中卯日

新嘗會の神今食よあききききき

ひきてり

由藤中納言存之云予
答云跪飲了并流瀆下
屠又受酒授盃了可唱
平至次之入者下立
受酒自不飲之授盃再
唱平歎如藤中納言存
知者可爲獻盃歎代記
勸盃之由皆記之跪茶
又無不審歎土器也可
在此宜之由說之

一ノ方々之れハ屋ウありて一也とてあ
く坊之浦ハちるぐりく程すくして不
可一もくもくぬ信よけり世路多れハ
寛平元年十一月一ノ臨時祭とてしるを
たまふ其時ノ使ハ平院ノ大后時平公
いま之志申およそ此と先たすひける
とらん
百六十五
法皇火沖飯 一日
六月廿四日 祇官ノ沖贖物も六
月乃くく

國忌職員令義解國忌
謂先皇崩日也

崇福寺拾芥下末崇福
寺近江國志賀郡號志
賀寺天智天皇御願

朱鳥二年朱鳥八天武
天皇羊号朱鳥一羊

三終ノ其明羊持統
天皇元年也

中興祖庭事苑第六卷
云玉室中否而再興謂

之中興如周之宣王漢
之光武唐之中宗

天智天皇八朝敵蘇我
入鹿ヲ誅シ天下ヲ治

玉ノ故中興ノ主ト云

百六十四 大神祭 上卯日

三福乃大時祚乃祭なり四月小なる

百六十五 國忌 三日

天智天皇ハ沖國忌ナリ崇福寺ノ
約ハ朱鳥二年一ノり一ノ天智
皇ハ御願トシ皇孫沖子沙母ハ皇極天皇
ナリ沖位ニシテ皇孫ノ近江國志賀郡
大津乃文小ノ一ノ中興ノ主ト云
あり一ノ小ノ一ノ國忌ハ一ノ小ノ一ノ
てありたまハ皇孫ノ一ノ一ノ一ノ事ト成

○江次第云今夜蓋栢
梨左近衛府攝津在名
也以彼地利所造之
也
稟書曰栢梨昔府中將
和氣其以攝津國栢梨
庄寄左近府以其地利
充官人以下酒糶料

綿乃事を衣ふこれよりふりて波の
とれこれ小内侍の麓下とつてくは
とつけくおのゑ人御守御の層小
はくさる事つそ名獨あり取原邊に
まてこれおのる栢梨の御堂つてい
事よりそれいたと侍有乃故に攝津國
栢梨庄といふありり御酒と有りて
とつて御堂乃ありりまて佛名の中
志をわすく大納乃と徳并りありり
て廿二のふと大將とつてひり給ふ
家よりなりり御事とゆへに取え
ふ也佛名乃御守御の首の取り
くぬくぬく延喜乃御代つて
殿つて和琴とつてあまを給ちり
也此佛名といひ三世の法佛の
名号は
唱へる根の罪と滅とれのおのり
佛名は小つて御功徳はつて
きつてやまを給ちり十二月より
義和元年の毎年佛名三ヶ日ありは
徳國つて殺生禁断なり格小み

○三世諸佛ノ名号一
萬三千佛名号也
○佛名經七卷後魏北
流支印三藏
譯
○佛名經五卷元魏天
善提流世三藏
支譯
蓋囊鈔第九云仁明天皇
承和五年ヨリ佛名リサレ
一七有無不定十三年ニ破
定置以降用十六卷佛
名經此中所載佛菩薩
賢聖等名一萬三千餘

佛名は小つて御功徳はつて
きつてやまを給ちり十二月より
義和元年の毎年佛名三ヶ日ありは
徳國つて殺生禁断なり格小み

園記觀應元年荷前
停止當不及承事也

○先十三日侍リ
ケルヤト云テ後醍醐天皇
年中行事ノ文也其下此
比云々の事ナリ

面影許抄アリ

○十陵 山階山陵天
智天皇 田原山陵光仁天
皇 栢原山陵桓武天皇

八島山陵崇道天皇
深草山陵仁明天皇

後田邑山陵光孝天皇
在仁和寺内大教院丑

寅 後山階山陵醍醐
天皇在醍醐寺北曼陀

羅堂丑寅山槐記云醍
醐北小野也 中宇治

山陵贈冷泉院母皇太
后官藤安子 後宇治

山陵贈皇太后官茂子

後宇治山陵贈皇太后

茂子鳥羽院母

○八墓 多武峰鎌足

大和國十市郡

愛宕忠仁公 葛野仲

野親王 或云高島墓

後葛野當宗氏 或云

河島墓 宇治昭宣公

小野高藤公 後小野

官道氏 後宇治皇太

后班子 堅八墓

今宇治冷泉圓融母后

合九墓

昔此御門御馬

イナキテ侍キ

○此俗説也又俗説帝

登天ニ至其奔シ馬籠

ノホトリトニル其籠ヲ駒

籠ト名トイハレニ日本

五十一 苜蓿

權后曰延喜式中務省式云
凡二月奉諸陵幣者令膳陽寮釋日訖即申官

先十三日侍リケルヤト云テ後醍醐天皇
年中行事ノ文也其下此比云々の事ナリ
面影許抄アリ
○十陵 山階山陵天智天皇 田原山陵光仁天皇
栢原山陵桓武天皇 八島山陵崇道天皇
深草山陵仁明天皇 後田邑山陵光孝天皇
在仁和寺内大教院丑寅 後山階山陵醍醐天皇
在醍醐寺北曼陀羅堂丑寅山槐記云醍醐北小野也
中宇治山陵贈冷泉院母皇太后官藤安子 後宇治
山陵贈皇太后官茂子 後宇治山陵贈皇太后茂子
鳥羽院母 ○八墓 多武峰鎌足 大和國十市郡
愛宕忠仁公 葛野仲野親王 或云高島墓 後葛野
當宗氏 或云河島墓 宇治昭宣公 小野高藤公
後小野官道氏 後宇治皇太后班子 堅八墓
今宇治冷泉圓融母后 合九墓 昔此御門御馬
イナキテ侍キ ○此俗説也又俗説帝登天ニ至其
奔シ馬籠ノホトリトニル其籠ヲ駒籠ト名トイハレ
ニ日本

ありて其まき帰給いさりきある家
和といげく丸知人なり 多沙皆れた
らるるまらるる 阿沙さきささる
てさる伊とささる事 しては
る法加い白壁を望れ 田原れはさる
天皇乃相原乃以ささる 山原道乃八
乃沖ささる 仁乃天皇深草乃沖ささる
とさるさあさる 親正小乃ささる
在伏見山從東邊二町許入在指荷南野山槐記云伏見山松原也 大和國添上郡
在嘉祥寺内

若鉦改

五月小

高根原

純見八天智天皇十年
 九月ヨリ寢疾不豫十月
 疾病弥留十二月己丑
 崩于近江宮トリ萬葉
 集三天皇天皇不豫并
 御病急崩御時太后奉
 御歌トモア俗説信スル
 也ス

内侍取沖神樂 雲圖抄以吉日被行之ヲ

皇
 五
 主上初幸あり先典侍掌侍まのりよりけ
 りい二一人本丁とさうと内侍取まのり
 幸らりぬき沖洋か自祝詞をうり此ら
 取人菊殿乃西けいにて物れ番あは
 と内侍取乃まのり殿寮慢を引て寢人
 邊燎をくく本末乃座の切み海りけむ
 里を清乃座にさし張りあり人長丁と
 小の座をり取身小座なりけく人長
 とく見てるとはけりつとさしやき
本末座ウコ也
江次第云先唱高六名對面
雲圖抄詳也

採物 ○梁塵愚案採採
 物歌注ト物神以下皆
 手ニル物也
 ○江次第云次人長起
 召方男數人一進奉
 仕畢人長退○又云人
 長起召方男頭一人殿
 上一兩人殿上人
 地下召人等各一兩其
 人或至庭火前指退或
 追續
 ○江次第云人長立庭
 燎前行事次稱人人令
 起才試本末皆起殿上
 起人長云主殿寮御火
 白任礼又云掃部寮藤
 突給次云召御琴可仕
 者其人把和琴著藤突
 彈之人長云候本方即
 著本方座上又云召御

とさし御とつて次第小のと邊寮慢
 幸未乃方和琴乃身小むとけき小座き
 てけうまのり人長おやとさう小ま
 りひく管和琴拍子なとさうらぬ未れひ
 けりーむらつささい未おけく和琴と佐
 小の座に座のとな小恙す於座と座
 小の座とさうらあひ庭火りくとさうさ
 人長よりハ採物とさう韓神乃拍子あげ
 て及人長とさうとさうら後動堂あり
 かく許とさうとさうらみとさうらとさうら
江次第人長起舞

公事根原

四

笛可仕者同上仰云候
本方又云名篳篥可仕
者同上仰云候末方又
云名御歌可仕者同上
仰云候本方又名一人
同上候末方次仰云合
天仕礼訖人長退次本
末座勸盃各三献頭以
下取之藏人所瓶子次
衛府名人著座次本末
打拍子出歌先取物神
御幣等也及韓神人長
起舞次盃一巡如前
訖人長起召亦男頭一
人殿上人一兩人殿上
名人地下召人等各一
兩其人或至庭火前指
退或追續人長兩三步
進上古多後人長或又
有奉仕散樂之者訖佐

各座乃未よりす見てむさゆはさく
るりけ薦三首小前張内也まろくろり子ササ羅畢ササおり
てぬまの星の河をの海にひらつるさ
るりて星三首をそと給念其弱と
る小常乃こく一福と給小陰時乃御神
樂の秋乃未小終るれは長陰時乃れと今
はこまきるこくは成るのる乃取也
御取也るこあれ時の星と別れり
時御蓋然うこくも御蓋るれはこく
福のふて作る終るは後より陰時御
神樂はは福の事つてぬまの事殿
よ還御あり此御神ふ冬一条院乃御
時よりよりまろ海子より終りる事保
るりはるるもくは事小成りるの
事永乃乱よて内乃下西海小渡御を
つとく三事とつて事なる都へへ
つと事一時的三ヶ事乃御神樂うあり
さ七終るおして陰時小終る人して神
樂乃終るの天照大神乃あゆみして
こしてあゆみ給一時的神乃いふり

井波利次星次朝倉
歌大楚駒人長起舞
○二水記云オ尹
星 吉く利く本歌
カホレトイフマロトエハ星
云云

天照大神ノエニイハ
古語拾遺云素戔嗚神
奉爲日神行甚無狀種
種陵侮云于時天照大
神赫怒入于天石窟閉
警戸而幽居焉云云天
鈿女命以眞辭爲爲變
以蘿葛爲手繩以柞葉
飲飲木葉爲手草手持
著鏝之扇而於石窟
前覆垣槽裏庭燎乃作
能復相與歌舞

天照大神ノエニイハ
古語拾遺云素戔嗚神
奉爲日神行甚無狀種
種陵侮云于時天照大
神赫怒入于天石窟閉
警戸而幽居焉云云天
鈿女命以眞辭爲爲變
以蘿葛爲手繩以柞葉
飲飲木葉爲手草手持
著鏝之扇而於石窟
前覆垣槽裏庭燎乃作
能復相與歌舞

神樂はは福の事つてぬまの事殿
よ還御あり此御神ふ冬一条院乃御
時よりよりまろ海子より終りる事保
るりはるるもくは事小成りるの
事永乃乱よて内乃下西海小渡御を
つとく三事とつて事なる都へへ
つと事一時的三ヶ事乃御神樂うあり
さ七終るおして陰時小終る人して神
樂乃終るの天照大神乃あゆみして
こしてあゆみ給一時的神乃いふり

ふれりゆよと細国命まゝに此乃らふと
所らりてひげとまきさしや
てしむまゝに庭火とたきうい
らりし事うまは我朝の風俗
神代乃縁記他よりけり人まき

百五 御贖物 本日

六月小御

百七十五 大極 同日

是も六月小御

百七十六 延慶 同日

連體の河海抄紅葉賀
除夜二難の追事也鬼ヤ
ラート云追ノ六ツヤラ
フトヨム也又難一字ツ
云鬼ヤライヨム也始自
祭事迄于何家行之

方相氏 〇周禮夏官方
相氏掌蒙熊皮黃金四
目玄衣朱裳執戈揚盾
帥百隸而特難以索室
斷疫註方相猶言放相
今難頭是也
四目了了〇延喜式其
方相假面一頭黃金
四目

考ふにわらふむらさけい大舎人寮思を
けり先張陽寮祭人をもてあ殿のま
小許きてし母とる下是と妙小殿と
くも御殿乃方とく桃乃らあり
夫しそりし他花門よりゆ、東庭と
て流に乃戸小い川こし御お小灯と
包ともい東庭延細餉臺盤取のく人志見さ
つふ灯臺と原とくをてくともい
遊難とつふ年中乃夜氣とつふ
鬼とつふ方相氏の半乃の四月ありて

八事根原下

百七十七

儀子トテ九人。○延喜式
 儀子八人紺布衣八領
 内裏四門^ノ延喜
 式方相首親王已下隨
 次入立中庭陰陽寮儀
 祭畢親王已下執桃弓
 葦箭桃杖^{出宮城四}
 門^{東陽明門南朱雀門}
 西段^{富門北達智門}
 慶應二年^{類聚國史七}
 十四文武天皇慶雲三
 年是年天下諸國疫疾
 百姓多死始作土牛大
 難
 ○園觀應元年記於土
 御門殿被行追儼石兵
 兵衛督實音御行之上
 御不參云

おそはしけり而ときくもふそが
 儀子八人紺布衣八領
 内裏四門延喜式
 式方相首親王已下隨
 次入立中庭陰陽寮儀
 祭畢親王已下執桃弓
 葦箭桃杖出宮城四
 門東陽明門南朱雀門
 西段富門北達智門
 慶應二年類聚國史七
 十四文武天皇慶雲三
 年是年天下諸國疫疾
 百姓多死始作土牛大
 難

寫本、奥書云

應永廿九年正月十二日書之、畢

偏爲嬰兒也外見有憚 内大臣

一本、奥書云

右根源抄依新營御所望後成恩奇

關白 兼良公于時 不被見一紙之書

被書進之云云

書千公事根源抄集釋

公事根源抄者所以記年中公事之根源也其大意取國史諸書令人知公事大要矣先是二三子從余求講說然世本多傳寫之謬余有所考是正文字亦引據諸書以明其義名曰集釋應二三子之望頃書肆村上氏欲鏤于梓余謂註義雖不詳為幼學之助亦不為不多古曰勿以善小而為此亦小利人之善乎遂以模印云爾

元祿七年六月廿六日

松下見林書

銅駝坊書肆平樂寺村上勘兵衛壽梓

平安女書林 橘枝堂藏板目錄

野田藤八

古語拾遺言餘抄	五冊	用藥須知	三冊	繪本長物川	貳冊
神武卷集解	二冊	同後編	四冊	同世尊像	三冊
本朝續紹運錄	一冊	同續編	三冊	同心亭老卷	三冊
前王廟陵記	二冊	廣參品	一本	萬葉百人一首	一冊
同增補	二冊	怡顏齊介品	二冊	女文要神歌	一冊
談家八系圖	十冊	食療正要	四冊	櫻信世室袋	一冊
本朝紹運錄	一冊	笑話出思錄	一冊	市井雜談	三冊
正續疑孟	一冊	陶淵明全集	四冊	新編源氏物語	一冊

為學正論 <small>長門鶴齋集</small>	訓幻字義 <small>東漢集</small>	萬世用之書 <small>山陰虎</small>
古訓輯要 <small>同</small>	孝經頭書 <small>新</small>	滕王閣 <small>歐陽詢石刻</small>
名義集覽 <small>同</small>	諸錄字義	雲臺將軍 <small>李邕石刻</small>
量地指南 <small>村華昌私著 覽不取之三冊</small>	管象文章	海燕帖 <small>董真白石刻</small>
京繪圖 <small>懷中一牧摺</small>	和分合小淡	勸善樓姬傳
同道法附 <small>彩也</small>	同名本考	風俗地人氣質 <small>八冊</small>
同增補新板 <small>右同</small>	同字系字集 <small>四玉原</small>	日用食性 <small>一冊</small>
秋風錄 <small>徂來倉書斐 後野東甫著</small>	同竹園抄 <small>乃原之 手の上</small>	仙傳 <small>一冊</small>
五病回春發揮	反古之存 <small>仙傳 八冊</small>	仙漫集 <small>一冊</small>

四書 <small>正佐點</small>	言苑集 <small>今川了俊著 七冊</small>	興慶妹背山 <small>後入 三冊</small>
古文後集 <small>同</small>	函齋抄書全集	風流茶人氣質 <small>日 五冊</small>
梅花掌中指南 <small>五冊</small>	同初學指南抄 <small>二冊</small>	向不見園 <small>日 五冊</small>
同 新成	伊勢拾穗抄	風流勸進 <small>日 五冊</small>
古易一家言 <small>新井自撰 小刻一冊</small>	年中行古歌合 <small>二冊</small>	俄仙人戲言 <small>日 五冊</small>
同 補 <small>同</small>	撥東指掌圖 <small>一收摺</small>	江戸此苦影 <small>日 五冊</small>
易術便蒙 <small>片岡如圭著 小刻一冊</small>	堀川施書合	煙口駒 <small>日 五冊</small>
易話 <small>同</small>	連秋雨夜の記 <small>宗長著 小本一冊</small>	孫倉諸靈袖 <small>日 五冊</small>
筆道如意珠 <small>一冊</small>	職人歌合	一目千軒 <small>新板 一冊</small>

三因方 <small>陳玄無若著</small>	十二冊	寺澤四季雜末	一冊	同家手本	一冊
新悟園 <small>了意著</small>	十冊	同初學雜末	一冊	同不求人	一冊
量地指南增補 <small>附錄</small>	三冊	鶴泉遺稿 <small>若加小葉玄惟著</small>	三冊	同新書學	一冊
同後編 <small>近刊</small>	五冊	尺牘集要	四冊	世蔭辨畧	四冊
四書 <small>道春點</small>	十冊	千金方藥註 <small>松留定菴著</small>	四冊	本艸正為 <small>若山著</small>	六冊
芝宮家萬葉集	二冊	本艸正正為	一冊	同刊拾遺	一冊
元言釋書和解 <small>惠空著</small>	廿三冊	古易斷時言 <small>新井白蟻著</small>	四冊	茶道全書	五冊
病名彙解	六冊	周易一生記	五冊	茶雪月集	二冊
十四經和語抄 <small>保本抱子</small>	五冊	易術手引州小判冊		東山及香合	二冊

